

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：84504

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01650

研究課題名（和文）子ども理解につなげるトラウマインフォームドな環境の構築に関する研究

研究課題名（英文）Research on the construction of trauma-informed environments that lead to understanding children

研究代表者

酒井 佐枝子（SAKAI, Saeko）

公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構・こころのケアセンター・研究主幹

研究者番号：20456924

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、支援者と支援組織におけるトラウマインフォームドな環境の構築に向けた研修のあり方を提言することを目的に、トラウマインフォームドケア（TIC：Trauma Informed Care）の導入の必要性和有効性に関する調査研究を行い、TICの知識とスキルの習得を目的とした研修および教材開発および利用可能性に関する調査研究を行った。

TICは事象への理解と対応を常に模索し続けるらせん状の循環によって、環境を構築するたゆまぬプロセスである。支援の職場風土に根づくうえで、学びとその継続の工夫及び職場風土の安全安心の醸成を柱とした研修システムの精緻化の必要性が抽出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、TIC普及に関する先進諸国の動向調査及び論文精査とともに、本邦における支援者の実態調査をふまえた上で、トラウマのある支援対象者への支援を行う支援者や支援機関を対象としたTIC研修プログラム及び教育動画教材の開発を行い、これらの導入可能性及び実践への普及を検証した。安全安心な生活環境を整備するうえで、トラウマの視点から支援対象者の言動を理解することは不可欠であり、トラウマに関する共通理解に基づいた支援を提供することは、支援対象者だけでなく支援者及び支援組織の安全安心を確保するうえでも必須といえる。こうした環境を構築するための研修のあり方を提示した点において、社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to put forward a suggestion on training system for the creation of a trauma-informed environment in support providers and their organizations. To fulfill this objective, research studies were conducted on examining the necessity and effectiveness of the introduction of Trauma Informed Care (TIC), the development of TIC training course and educational materials for the acquisition of TIC knowledge and skills, and a research study on the availability of TIC. TIC is a persistence process of building the environment through a spiral cycle that constantly seeks to understand and respond to events. The need for elaboration of a training system that focuses on learning and its continuation, as well as the fostering of safety and security in the workplace culture, was identified as a necessity in rooting support in the workplace culture.

研究分野：トラウマ

キーワード：トラウマインフォームドケア 児童福祉 支援者 支援組織

1. 研究開始当初の背景

トラウマとなりうる出来事を体験している子どもは少なくない。児童福祉施設や教育機関などの支援現場では、トラウマの理解を前提とした対応が必要とされるが、現状は十分な対応や方略が確立されておらず、不適切な対応によって子どもへの再トラウマを招く(亀岡、2014)ことが懸念され、従来の支援のあり方の再考が求められている。欧米における一般人口を対象とした大規模コホート研究「逆境的小児期体験に関する研究(Adverse Childhood Experiences Study; ACE Study)」(Felitti et al., 1998)以降、トラウマや小児期逆境体験がその後の人生に及ぼす甚大な影響について周知されることとなった。したがって、社会的養護に限らずすべての子どもが生活する環境自体が、トラウマの知識を有し、その影響を理解したシステムとして機能する必要がある。トラウマの影響を理解した対応や支援を支援者が提供できることは、子どものその後のウェルビーイングの向上に寄与する。

トラウマインフォームド・ケア(Trauma Informed Care; TIC)とは、あらゆる対人サービスの提供者がトラウマの知識とその影響を理解し、回復に必要な支援を理解して対応することである(Bloom et al., 2006)。これは、生活の中でトラウマに配慮した環境を整備し、トラウマの知識に基づいたかわりを行う態度といえる。しかし本邦では、トラウマへのかかわりとしては個別の心理療法を中心に、トラウマやリスクのある人に特化した支援が先行されてきた。そして、公衆衛生的視点に基づくトラウマの支援体系の構築はまだなされていない。加えて、トラウマを抱えた人への支援においてしばしば問題となるのは、支援職の二次受傷である(Figley, 1995)。支援中での傷つきや疲弊は、臨床現場で大きな問題となっており、支援組織そのものがトラウマインフォームドな環境となることで支援職自身のトラウマや二次受傷への理解が深められる(Bloom, 2013)。つまり、トラウマに対応できる組織を構築することは、支援対象者にとって有益であるばかりでなく、支援者のパフォーマンスやウェルビーイングの向上にもつながる。しかし、本邦では TIC の視点から支援組織のあり方を検討する組織モデルの検証はなく、子どもを支える支援組織における TIC/システムの開発は喫急の課題である。

以上のことから、TIC 習得のための教材および研修プログラム開発及び実践への普及を検証し、支援者および支援組織の学びのあり方を提示していくことが求められる。

2. 研究の目的

本研究は、支援者と支援組織におけるトラウマインフォームドな環境の構築に向けた研修のあり方を提言することを目的に、TIC 先進諸国における先駆的モデルで用いられている諸概念の精査及び普及に関する動向精査、本邦におけるトラウマ支援の実態調査及び TIC 導入に関する課題抽出をもとに、TIC 習得のための教材及び研修プログラムの開発および実践への普及を検証し、TIC に基づいた安全安心な環境を構築するために求められる視点を提示することを目指す。

3. 研究の方法

いずれの研究も、大阪大学大学院人間科学研究科倫理委員会もしくは兵庫県こころのケアセンター倫理審査委員会の承認を得て実施された。

<研究1>

(1) 目的

本邦における支援や教育に携わる支援者および支援組織が、支援対象者への支援やトラウマへの支援を行う上で困難に感じていることを抽出し、本邦における現状を把握する。

(2) 対象

研究代表者および研究分担者が主催するシンポジウムやワークショップに参加した支援者 474 名、および児童福祉領域において心理的及び医療的支援に携わっている実務家とのワーキングチームによる検証を行う。

(3) 方法

調査内容

質問紙調査として、TIC に関する知識の有無、実践の有無、所属組織における支援を行う上で困っていること等に関して、自由記載による調査を行う。調査結果をふまえて、ワーキングチームによる本邦の現状に即した TIC 導入に必要な視点を検討する。

分析方法

各自由記載内容について、帰納的コーディングにより共通するコードからカテゴリおよびテーマの生成を行い分析する。

<研究2>

(1) 目的

TIC 先進諸国における先駆的モデルで用いられている諸概念の精査を行う。

(2) 方法

“Trauma Informed Care”、“Child Welfare”、“Trauma Informed Organization”、“Trauma

Informed Organizational Assessment”等の検索キーワードをもとにした文献研究、及び
実地調査を通じた共同研究を行う。共同研究者は Sandra Bloom 氏（ドレクセル大学）で
ある。

< 研究 3 >

(1) 目的

本邦の児童福祉領域の文化的背景を考慮した TIC 研修プログラムの開発、および施行を
通じた研修プログラム構成及び内容の精査を行い、研修のあり方を検証する。

(2) 対象

TIC 研修プログラム対象者は、児童福祉領域で働く支援者

(3) 方法

TIC 研修プログラム開発

研究 2 において精査したサンクチュアリー・モデルおよび The Child Welfare Trauma
Training Toolkit (CWTTT)をもとに、本邦の実情に即した TIC 研修プログラムを開発す
る。

調査内容

TIC 研修実施前後および研修 3 か月後に、TIC に関する態度や実践についての変化を質
問紙調査研究により把握し、ワーキングチームによる本邦の現状に即した TIC 導入に
必要な視点を検討する。

質問紙は、2 尺度及び自由記載項目により構成された。TIC に関する質問紙尺度として、
TIC に関連する個人の心理的態度を評価する尺度（ARTIC-10 日本語版：Niimura, et al.,
2019）およびトラウマインフォームドな組織風土を測定する尺度（TICS-10 日本語版：
Hales, et al., 2019）を用いる。2 尺度は、研修実施前及び研修 3 か月後の 2 地点において
回答し、自由記載は研修実施前後および研修 3 か月後に回答する。

分析方法

質問紙尺度の 2 尺度については、正規性が棄却されなかった場合は、対応のある t 検
定を、棄却された場合は Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて検討する。

各自由記載内容については、帰納的コーディングにより共通するコードからカテゴリ
およびテーマの生成を行い分析する。

< 研究 4 >

(1) 目的

日常業務内での TIC に関する学びを得る一手法としての教育動画教材の開発および、そ
の利用可能性に関する調査を行う。

(2) 方法

教育動画教材の開発

研究 1~4 で得られた成果をふまえ、本邦の実情に即した体系的な TIC の学びに求めら
れるテーマについてワーキングチームにて抽出し、各テーマに即した教育動画教材を
開発する。

教育動画教材の利用可能性に関する調査

開発された教育動画教材について、トラウマのある支援対象者を支援する支援者を対
象に、オンラインによる動画視聴調査研究を行う。研究協力者の支援者は、動画を視
聴する前後に、教育動画の構成や内容、実務への利用可能性に関する自由記載アンケ
ートに回答する。得られた各自由記載内容は、帰納的コーディングにより共通するコ
ードからカテゴリおよびテーマの生成を行い、分析する。

4 . 研究成果

< 研究 1 >

支援者個人または支援組織としての支援における困
難について、トラウマのある支援対象者に支援を提供
する支援者からの自由記載内容の分析を通して明らか
となったこととして、以下の点にまとめられた(図 1)。
子どもの言動の背景への理解や知識の不足、そこから
生じる支援組織としての一貫性ある対応の欠如、支援
者の多忙や精神的疲弊によるコミュニケーションの減
少、立場や役割による制限・限界、時間の足りなさ、連
携困難、そのことから生じる組織的疲弊、トラウマへの
理解に応じた支援体制が永続しにくい支援組織の枠組
みと風土により、TIC を導入することが困難である現状
が明らかとなった。こうした現状をうけ、ワーキングチ
ーム内において本邦の現状に即した TIC 導入に必要な視点を検討した結果、共通認識を得るた
めの研修システムの構築の必要性とともに、TIC を根付かせる障壁となる心理的な抵抗へのア
プローチも併せて行う必要性が導かれた。

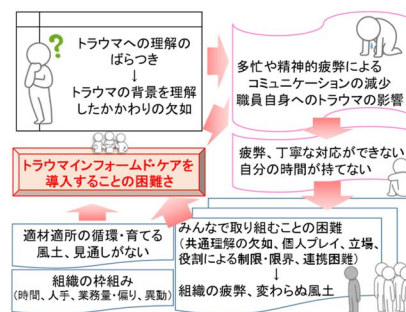


図 1 支援を行う上での組織的困難

< 研究 2 >

TIC 先進国である米国では、Trauma-informed Care for Children and Families Act が 2017 年に立法化され、連邦政府主導での TIC の導入と実践が奨励されている。また、行政主導の地域全体への統一したプロトコルでの研修プログラム実施という形態がとられ、TIC 普及における基本原理として NCTSN のガイドラインが採用されることが多いことが TIC に関する文献精査により明らかとなった。加えて、トラウマとその影響に関する基礎知識と、職務内でどのようにそれらに気付くかに関する体系的な研修カリキュラムである The Child Welfare Trauma Training Toolkit (CWTTT)を導入していることが多かった。

このことから CWTTT の翻訳許可を The National Child Traumatic Stress Network (NCTSN)から取得し、全翻訳を行った。CWTTT は、トラウマが子どもや大人の発達や行動に与える影響、児童福祉システムとしてトラウマインフォームドを導入するために求められる知識とスキルを、子どもとその家族に直接、接する支援者だけでなく、管理職にも教育するための各モジュールからなるキットである。NCTSN が提示する「トラウマインフォームドな児童福祉システムにおける 8 つの必須要素」をもとに、トラウマのある子どもとその家族理解に関すること、支援者自身に生じることを理解するために必要なことが網羅されており、直接支援を行う支援者だけでなくリーダー、スーパーバイザー、管理職を対象とした研修モジュールも網羅されている。

次に、トラウマインフォームドな組織であることを測るための各指標を検討し、帰納的コーディングにより共通するコードからカテゴリおよびテーマの生成を行ったところ、12 カテゴリ (TIC を備えるための準備、管理者の役割、リーダーの在り方、アセスメント、記録の活用法、プログラムの明確さ、スタッフ教育、スタッフの安全感、文化的差異に対する理解、危機対応、利用者の安全、利用者主導のサービス、利用者のスキル獲得、コミュニティ内での TIC) が抽出され、組織として TIC を根付かせる包括的視点の必要性が指摘された。

さらに、米国で TIC への抵抗を経験し、TIC が根付く困難を克服した Sandra Bloom 氏 (ドレクセル大学) との共同研究を通して、Bloom 氏が開発したサンクチュアリー・モデルの鍵概念である S.E.L.F (Security, Emotion, Loss, Future) ワークブックの邦訳、及び Bloom 氏の TIC に関する解説動画開発を行った。主な内容として、トラウマが個人だけでなく組織全体にも影響を及ぼすメカニズムに関する解説、支援現場における「再トラウマ」を理解することの必要性、TIC に求められる組織のありよう、本邦における TIC 導入における諸問題が挙げられた。

< 研究 3 >

(1) TIC 研修プログラムの開発

本邦の支援者の実態把握に関する研究により抽出された TIC の学びにおけるニーズをもとに、CWTTT およびサンクチュアリー・モデルを精査し、本邦の支援者に導入可能な内容を抽出したプログラムを開発した。TIC 研修プログラムは、以下の 4 部構成とした。

- 第 1 部 ト라우マへの理解を深める (定義と影響)
- 第 2 部 パラダイムの転換：トラウマインフォームドケアとは
- 第 3 部 支援者や組織へのトラウマの影響：一次的・二次的トラウマに気づき何ができるかを考える
- 第 4 部 安全な環境を創る

(2) TIC 研修プログラムの効果の検証

児童福祉の支援者を対象とした研修を実施し、研修内容に関する理解度や構成、実践への普及に関する調査を行った。

調査対象である児童福祉に携わる多職種多機関の支援者 (137 名) のうち、最終有効回答数は 114 名 (有効回答率 83.2%) であった。

ARTIC-10 および TICS-10 の合計得点及び各下位尺度得点について研修前と研修 3 か月後での違いを検討した結果、ARTIC-10 合計得点 ($Z=-3.47, p=.001, r=-0.34$) および TICS-10 合計得点 ($Z=-2.36, p=.018, r=-0.23$)、TICS-10 下位尺度である協働 ($Z=-2.72, p=.006, r=-0.27$) において有意な得点の差が認められた。すなわち TIC が反映された個人の心理的態度が TIC 研修後により増加し、また職場内における管理職のリーダーシップでは、一人の意見ではなく、多様な意見を反映した協働を意識した取り組みが増えたことが示唆された。また、支援者自身のメンタルヘルスを維持しつつ支援対象者に適切な支援を行うために、研修内容をどのように活かすかについては、支援対象者との接し方を見直したり、ルールの改善の検討、トラウマを意識した支援の展開、組織の共通認識として TIC を掲げる、支援者間での情報共有、安全・安心な環境づくり、職場での啓発活動、多機関への啓発といった視点が挙げられた。加えて、支援者自身の在り方を見直す必要性についても抽出され、自身の考えや物事のとらえ方の変化や自身に対する日常的なケアの必要性が指摘されるとともに、よりよい支援のための支援者自身の変化の必要性について言及された。

このように新たな知見の獲得及び実践への気づきが得られた一方、TIC 普及の具体的方法のイメージがしにくく、今後の組織内での適用可能性への模索、困難も示唆された。まず、TIC へのなじみのなさや誤解、伝えるスキルの不足とともに、時間的・心理的制約や話し合う雰囲気構築の構築困難感、共通言語・共通認識のなさ、定着させる難しさ等が指摘され、事例検討や具体的な実

実践での活用例の提示への希望等が自由記載内容にはあげられており、今後の TIC の組織内での展開可能性への具体的視座が求められた。

以上のように、TIC に関する支援者個人の態度は TIC 研修を通して変容する可能性が示唆された一方で、TIC に関する職場風土全体の変容は認められず、一朝一夕に職場風土に TIC が根付くことがないということが示唆された。課題として TIC に関する学びを継続し、職場風土全体への浸透を目指すための工夫を検討する必要性が抽出された。

(3) TIC 研修プログラムの構成および内容の精査

研修終了時アンケートにおいて記載された研修の構成や内容に自由記載内容を分析した結果、目標設定が明示され、講義・グループワーク等の時間配分等が適切であり、安全に配慮し、体験を通じた学びが用意されていたことで、納得しながら、理解につながる構成であったことが示唆された。一方で、今後工夫が求められる点として、研修参加者の習熟度別による難易度を調整する必要性や、モチベーションを高める工夫、事後の振り返りにつなげるための工夫の必要性等が指摘された。

< 研究 4 >

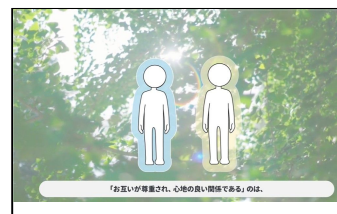
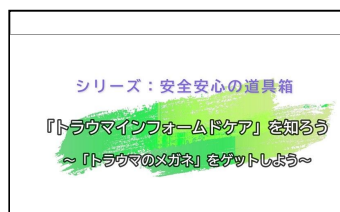
(1) 教育動画教材の開発

TIC の先駆的モデルである Sanctuary Model の鍵概念である S.E.L.F および CWTTC をもとに、TIC の基礎的学びに必要な 12 のテーマを抽出し、日常業務内で自学自習できる教育動画教材を 12 本開発した。各教育動画教材のテーマは表 1 のとおりである。

表 1 教育動画教材のテーマ

1	トラウマとストレスのちがひ
2	トラウマインフォームドケアを知ろう
3	トラウマケアピラミッドを知ろう
4	トラウマの種類
5	トラウマ反応はどうやってうまれる？
6	きっかけがあるから行動が生じる
7	支援者におきること
8	はじめに「安全」と「安心」
9	身体的安全
10	心理的安全
11	社会的安全
12	モラルの安全

教育動画の例



(2) 教育動画教材の利用可能性に関する研究

開発された教育動画教材について、トラウマのある支援対象者を支援する支援者を対象に、オンラインによる動画視聴調査研究を行った。ランダムに提示される教育動画を視聴した後、教育動画の構成や内容、実務への利用可能性に関する自由記載アンケートに移動する。動画教材へのアクセスは 512 件あり、そのうちアンケートに回答したもの（未完遂含む）は 156 件、最後までアンケートに回答したのは 68 件（データ数あたりの完遂率 13.3%）であった。

教育動画の流れとして、概念の解説の後に振り返りのための設問を提示した後に動画のまとめを提示する構成とした。振り返りの設問があることで、自身の考えの整理や生活と関連を持たせて考えることができ、また最後にまとめがあることで適度な時間内に要点がつかめるといった意見が多く聞かれた。また、動画には複数のキャラクターや自然の風景等を設定し、解説の補助的役割もしくは緩衝の役割を担わせている。これらについては、キャラクターやテキストが内容の重さを緩衝しているといった声が聞かれ、おだやかでかわいらしいデザインがあることで視聴対象を拡大できる可能性があるという意見も見られた。その一方で、ジェンダーに対するステレオタイプな印象も指摘された。内容としては、トラウマとその影響に関する基礎知識にとどまらず、支援者自身のトラウマの影響や、支援者が安全安心であること・セルフケアの重要性に関する知識を得ることができるなど、わかりやすい内容で TIC の導入や学びの復習として、支援対象者とともに支援者自身について振り返ることができる教材として位置づけられることが示唆された。

概して、支援対象者への情報共有に使える TIC に関する知識・内容を得るだけでなく、同僚や部下、上司の言動について適用できる内容でもあり、職場内での啓発やスーパーヴィジョンに使用でき、職場で共有しやすい内容と構成であることが示唆された。その一方で、自身の立場や組織内の風土として導入が困難であるという意見もあり、風通しの良い組織風土づくり、組織内のルールの見直しなど、TIC の導入および根づきには環境そのものも改めて見直す必要性が示唆された。

TIC は事象への理解と対応を常に模索し続けるらせん状の循環によって、環境を構築するたゆまぬプロセスである。職場風土に根付くうえで、学びとその継続の工夫及び職場風土の安全安心の醸成を柱とした研修システムの精緻化の必要性を提示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 亀岡智美・野坂祐子	4. 巻 22
2. 論文標題 国際シンポジウム・大会企画シンポジウム トraumインフォームドケア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	6. 最初と最後の頁 120-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井佐枝子	4. 巻 19
2. 論文標題 Traumインフォームドケア研修の支援実践への活用	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 心的トラウマ研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 酒井 佐枝子
2. 発表標題 児童福祉領域におけるTraumインフォームドケア研修受講の実践への影響
3. 学会等名 第21回日本トラウマティック・ストレス学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 酒井佐枝子
2. 発表標題 支援者が抱える課題と Traumインフォームドケア 導入の工夫
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第25回学術集会ひょうご大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 亀岡智美・大久保圭策・野坂祐子・丸岡正子・酒井佐枝子・壺内昌子・来往由樹・中村有吾・西大輔ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 219
3. 書名 実践トラウマインフォームドケア—さまざまな領域での展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>The National Child Traumatic Stress Network(NCTSN)ホームページ内に、児童福祉におけるトラウマトレーニングツールキット (CWTTT: Child Welfare Trauma Toolkit)邦訳版掲載 https://learn.nctsn.org/course/view.php?id=536&section=2</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野坂 祐子 (Nosaka Sachiko) (20379324)	大阪大学・大学院人間科学研究科・教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	ドレクセル大学		